

## ◎ 日本光学会の活動状況

# 日本光学会の発展——この 10 年の活動状況と今後の展望

池田光男\*

京都大学工学部 〒606-01 京都市左京区吉田本町

本来学会は個々の研究者や技術者の研究や技術を促進させるためにあると私は考えている。これを個人の側からいうと、自分の仕事の成果を発表したい、他の人の意見を聞いて今後の研究を進めるにあたっての参考にしたい、その場を提供してくれるのが学会ということになる。このゆえに学会は学会誌を発行したり学術講演会を主催したりするのである。日本光学会の過去と現在、未来を語るとするなら、当学会はこの本来の目的をどれだけ達成してきたか、またしようとしているのかという視点に立つことが大切であろう。

日本光学会は学術誌「光学」を発行してきた。研究者が研究成果を論文にまとめて学術誌に投稿する。編集委員会は査読者を決定し、評価を待ち、著者にそれを伝え、よりよい論文にするよう努力する。掲載決定はこの論文はいい論文ですよと折紙を付けるようなもので、著者にとっての意味は大きい。論文が実際に掲載されると研究の優先権（プライオリティ）が確立されることになる。誰が先にその発見をしたかなどが問題になるとき、論文に付記された「論文受理日」が判定材料となる。したがって学術誌の権威は査読をきちんと行っているか、受理日を正確に明記しているかによって左右される。学術誌によればその辺が実にあいまいなものもある。単なる学術講演会の予稿集なのに表紙は学術誌の表紙を使い、巻数まで当てていたり、発行が遅れて翌年になってしまったのに表紙には前年の年が書いてあったりするようなものがある。自ら学会の権威を落とすような行為である。

私の見るところでは「光学」はこの点とてもよくやっている。まず発行予定日に雑誌が出るよう編集委員会は最大の努力をしている。雑誌に対する信用を保つ上では最も大切なことである。また論文の査読も厳正に行われていて、査読者の意見も著者にとっては大いに参考にな

っているようである。この姿勢はこれからも是非続けていただきたいと思う。

研究者にとってもう一つ大切なことは、投稿した論文ができるだけ早く出版されることである。論文原稿を書くのはいつもぐずぐずしていて完成が遅れるけれども、一旦投稿すると明日にでも掲載通知が来てほしいというのが投稿者の心理である。この待ちの時間が短くなるためには編集会議が定期的に持たれること、査読者が迅速に返答をして下さること、さらに雑誌発行回数が頻繁であることが必要条件である。「光学」はこの条件を満たす一手段として 1987 年から隔月発行を毎月発行に変えた。経費的にも編集委員会や査読者にとっても責任と負担は増大したわけであるが研究者にとっては大変ありがたいことである。当時の幹事長、幹事会、編集委員会の皆さんの英断を多とするとともにこれも是非続けていくべきことと思う。

雑誌の出版は本学会のように主として個人会員を対象とする場合は経費的に大変である。学会費はそう高くするわけにはいかないからである。発行部数は少なくても個人ではなく図書館に配布し、その購読費は個人のそれの 10 倍にもし、かつそのような購読者を重視する方針だと経営的には楽になるかもしれないが、個人だけだと苦しい。日本光学会の現状はそうである。

ともあれ「光学」の果たしてきた役割はきわめて大きいと私は思っている。とくに若い研究者にとって自分の論文が活字になることの喜びは経験した者でないとわからないほどである。ある者はそれによって博士の学位取得が可能になったであろうし、また他の者はその業績によっていいポストを得たかもしれない。査読者の意見によって研究内容がさらに深まったという人は多いはずである。日本光学会は学会の役割の一つは充分に実行してきたと思う。

しかしもう一つの役割すなわち学術講演会については、日本光学会はその責任を果たしてきたとは残念なが

\* 日本光学会前幹事長

ら言えないような気がする。講演会やセミナーは結構開催している。しかしそれらの多くは講師をお願いして講義をしてもらうもの、したがって勉強会である。自分の論文を発表する所ではない。日本光学会は独自の論文口頭発表の場を持っていないのである。すなわち日本光学会は会員へのサービスはいろいろしているが、本来学会の責任の一つはこれを実行していないということになる。

これは本学会の組織上当然のことであったということかもしれない。本学会は学会とはいうものの、組織上は応用物理学会の中の一分科会である。本当の意味の学会ではないのである。日本光学会（応用物理学会）と表記すること、学会と言っても日本光学会会長はいなくて幹事長であること、理事会でなくて幹事会であること、また本会が育ててきた光学論文賞も応用物理学会の賞であり授賞者は応用物理学会会長であることなどがそのことを端的に示している。このため会員の論文口頭発表は応用物理学会の春秋講演会で行うことになっていて独自の発表会は持っていないのである。もっともこれで日本光学会は随分楽をしている。講演会の準備は何もせずに論文の発表ができるからである。もちろんいわゆるB会員は応用物理学会の会員であるから何もしていないというのは正確でないが、少なくとも日本光学会としては何もしていない。ずいぶん楽なことである。

しかし楽だからそれでよいということでもない。前にも書いたように学会とはそれぞれ個人の研究のためにある。だからそれ相応の苦労や寄与が必要である。苦労なしにいい実だけもらいたいというのは虫がよすぎる。応用物理学会に完全におんぶした学術講演会では本会員が全て満足というふうにならなければむしろ当然である。

私は学会を山に例えてよく話をする。山は頂があり裾野がある。一つの学会といえども内にはいろいろな研究分野がある。そのうち最も会員の多い分野が頂点を形成している。会員数が少ない分野は裾のしかも端の方である。時代とともに頂点に位置する分野は変わっていく。日本での光学研究は長い歴史を持ち、あるときは応用物理学会の頂点を形成していた時もあった。しかし今はそうではない。中心から少しばずれた所に位置している。

そして日本光学会というやや小さい一つの山を形成しているのである。その山の頂点は応用物理学会の頂点よりも低くかつやや端の方なので、応用物理学会という大きな山にもう一つの小さな山がくっついている様相を呈している。

ところがこの日本光学会の山の中にもまたいろいろな分野があって、頂を形成している人、裾野を形成している人がいる。問題はこの裾野を形成する人々に見られる現象である。彼らの分野は日本光学会という山には入るが応用物理学会という山からは完全にはみ出てしまう場合があるのである。その人たちにとっては応用物理学会というのはおおよそ縁のない学会で、したがってその講演会で自分の論文を発表することは全く考えない。そういう状態になる。

そこで日本光学会が考えだした方策が研究グループという制度であった。自分たちで研究グループを形成し、研究発表の場を持って下さい、年10万円の援助をします、というものである。この方策は効を奏し、結果として日本光学会はさらに裾野を広げていったといえるであろう。しかし同時に問題もでてきた。研究グループによっては自らが成長してくると、親学会の日本光学会に属しているメリットがあまりなくなってくることに気づいたのである。すなわち日本光学会が独自の論文発表講演会を持たないことによる限界が見えてくるようになるのである。研究グループ内の発表よりさらに広い範囲の人々の前で発表したいという気持ちは当然グループの人々の気持ちであり、したがって日本光学会が講演会を主催しておればそこで発表したい。しかしそれがないとなると日本光学会につながっているメリットはないではないかということになる。

日本光学会はしたがっていま一つの岐路に立たされていると私には見える。少なくとも日本光学会主催の研究発表講演会を早急に具体化するときに行っていると思う。学術誌の方は前述したように健全になった。車の両輪のもう一つの方、学術講演会をどうするか、これの選択が日本光学会の将来の左右を決定するものと私には思えるのである。

(1992年1月6日受理)